

# 芥川龍之介の松江体験 ― 失恋と『羅生門』誕生のあいだで ―

岩田英作  
(総合文化学科)

Akutagawa Ryunosuke's Experiences of Matsue

- Between Lost Love and the Writing of Rashomon -

Eisaku Iwata

キーワード：『翡翠記』 『松江印象記』 川の水 夕方

## はじめに

大正四（一九一五）年、芥川龍之介は友人井川（恒藤）恭の招きでひと夏を松江で過ごした。当時、東京帝大の二年生だった芥川は、その前年に少なくとも二つの失恋を体験している。一つは実家の女中への片思いであり、もう一つは青山女学院を卒業した女性が相手で、結婚の話まで進んだものの養家の反対にあつて破談となった<sup>〔註1〕</sup>。井川の誘いは、失恋によつて傷心した芥川を慮つてのことだった。

さて、芥川の作家としての出発を飾る『羅生門』が世に出たのは、大正四年十一月のことである。松江に來遊してわずか三カ月後のことであつた。現在では、『羅生門』の下書きメモ、断片原稿の調査により、松江滞在中かもしくは帰京直後に『羅生門』の草稿が書かれていたことが明らかになつている。

芥川の失恋体験と『羅生門』の関わりについては、芥川自身が後に書いているところによると、失恋の後遺症で気が沈むため、反対に現状とかけ離れた「愉快な小説」を書きたくて今昔物語に材をとり、できたのが『羅生門』であり、また『鼻』だったとある<sup>〔註2〕</sup>。

失恋と『羅生門』誕生、そしてそのあいだにあつた十七日間（八月五日～二二日）の松江滞在。小論では、この三者の關係に留意しながら、松江で芥川が体験したことの実相を考察する。

## 一・芥川龍之介『松江印象記』について

大正四（一九一五）年、京都帝国大学に在学していた井川恭は、郷里の松江に帰省した折、八月から九月にかけて地元「松陽新報」（現在の「山陰中央新報」）紙上に、『翡翠記』と題して計二十六回にわたつて隨筆を掲載した。なぜに一介の学生が地方紙とはいえ新聞に連載を持つことができたのかについて、寺本喜徳氏によれば、「井川恭が『松陽新報』を主な発表舞台とする山陰文壇の常連であるのみならず、中央の投稿雑誌にもしばしばその名が記される文学青年であつたからである<sup>〔註3〕</sup>。」という事情によるものであるらしい。

『翡翠記』の内容について大まかに述べれば、前半の中心を成しているのは一高時代の友人四人からの手紙であり、後半の中心が松江を訪れた芥川との交遊である。『翡翠記』が掲載されていた時期の「松陽新報」は現在残つておらず、したがつて『翡翠記』が掲載された新聞の日付ま

で特定することは困難である。しかしながら、『翡翠記』の特に後半部分については、芥川の松江滞在について、実際の出来事からおよそ一月遅れで「松陽新報」に掲載されていたことが明らかである。

さて、『翡翠記』の後半、すなわち芥川との松江での交遊を記した箇所には、「日記より」として、芥川が書いた松江の印象が挿入されている。「十四」に「日記より」として署名は「芥川龍之介」とある。「二十一」に「日記より(二)」、「日記より(三)」として署名は「芥川龍之助」とある。芥川が、「芥川龍之介」と署名して公に書いた文章は、この『翡翠記』の「日記より」が最初である。<sup>(注4)</sup>この「日記より」に該当する部分は、『松江印象記』という題名で全集に掲載されている。以後、『翡翠記』中の芥川執筆部分を『松江印象記』という呼称で統一して用いる。

それでは、『松江印象記』から、文字通り芥川の松江についての印象を見てみることにする。

『松江印象記』は、次の一文から始まる。

松江へ来て、先自分の心を惹かれたものは、此市を縦横に貫いておる川の水と其川の上に架けられた多くの木造の橋とであつた。

松江の印象として、芥川が真っ先に挙げたのが、「川の水」とそこに架かる「木造の橋」である。それに次いで芥川の心を捉えたのは「千鳥城の天守閣」である。そしてさらに芥川は松江の町並みにも言及し、「道路の整理と建築の改善とそして街樹の養成」において、「松江市は他のいづれの都市よりも優れた便宜を持つてゐはしなないかと思ふ。」と述べている。

芥川はその一方で、松江のマイナスイメージについても書いている。一つには、新たな銅像を建てるために、「古色を帯びた幾面かのうつくしい青銅の鏡」がその材料として積み重ねてあるのを見て、芥川は「愛す可き過去の美術品を破壊する」ことを残念としている。もう一つには、嫁ヶ島の防波工事について、「防波工事の目的が、波浪の害を防いで嫁ヶ島の風趣を保存せしめる為であるとすれば、かくの如き無細工な石垣の築造は、其風趣を害する点に於て、正しく当初の目的に矛盾するものである」と非難している。

これらのことから、芥川が日本の伝統文化に対して価値を置き、そのいくつかが大正期の松江に存することを高く評価していることがうかがえる。そのことに加えて、『松江印象記』の次のような書き方に注目したい。『松江印象記』の構成は、「日記より」に対応して「一」「二」「三」の三つの構成から成り立つ。そのうち「一」と「二」の終わりには、次の通りの文章がある。

【一】の末尾

自分は松江に対して同情と反感と二つながら感じてゐる。唯、幸にして此市の川の水は、一切の反感に打勝つ程、強い愛惜を自分の心に喚起してくれるのである。

【二】の末尾

そして最後に建築物に關しても松江はその窓と壁と露台(ばるこん)とをより美しく眺めしむ可き大いなる天恵——ヴェネチアをしてヴェネチアアらしむる水を有してゐる。

「一」、「二」ともに、松江についていろいろ印象を語っているが、帰着するところは松江を流れる「川の水」なのである。そして、「三」では松江の印象のまとめとして、ほぼ必然的に「川の水」の話題が以下の通り語られることとなる。

松江は殆ど、海を除いて「あらゆる水」を持つてゐる。椿が濃い紅の実をつづる下に暗くよどんである濠の水から、灘門の外に動くこともなく動いてゆく柳の葉のやうに青い川の水になつて、滑な硝子板のやうな光沢のある、どことなくJHELIKEな湖水の水に変わるまで、水は松江を縦横に貫流して、その光と影との限りない調和を示しながら随所に空と家とその間に飛交ふ燕の影とを映して絶えず懶い呟きを此処に住む人間の耳に伝へつゝあるのである。

ここには、芥川が松江を流れる「川の水」にいかにも強い印象を受けたかがよく表れている。

さてここで、芥川が松江に見た「川の水」と比較したい事象が二つある。一つは、志賀直哉の『濠端の住まい』に見る「川の水」であり、もう一つには、芥川自身の書いた『大川の水』におけるそれである。

志賀直哉は、大正三(一九一四)年五月に松江を訪れ、三月余りにわたって滞在した。すなわち芥川が松江を訪れるおよそ一年前に志賀は松江の地を踏み、松江城の濠端の一軒家を仮寓の宿としたのである。志賀と芥川の類似はそればかりではない。井川は芥川を迎えるために宿泊用の家を用意したのだが、その家こそ志賀が滞在した濠端の家だったのである。つまりは一年ほどの時を隔てて、先の引用の中で芥川が描写した「暗くよどんでゐる濠の水」を、志賀も芥川も同様に眼前に眺めていたことになる。<sup>(注5)</sup>

志賀の『濠端の住まい』の結末は、次の通り締めくくられている。

翌日、私が目覚めた時には猫は既に殺されていた。死骸は埋められ、葬に使った箱は陽なたで、もう大抵乾かされてあった。

「陽なたで、もう大抵乾かされてあった」その箱は、乾くまでは当然濡れていたのである。なぜ濡れていたかと言えば、その箱は中に生きた猫を入れたまま、濠の水中に沈められていたからである。濠の水をはじめ、松江の自然は、「人と人ととの交渉で疲れ切った」〈私〉をして、「大変心が休まった」という心境をもたらしにくれるものだった。しかし、結末に描かれた濠の水からは、そのような心の癒しに結びつくようなイメージを導き出すのは困難である。しかし、かと言って、そこから負の感情を読み取ることも実は難しい。濠端で起きた惨劇は、〈私〉の寝ている間に片が付いていて、起床した〈私〉が殺された猫の死骸を見ることはなく、水中で猫の殺害に用いられた道具も乾燥して、あとには酷薄なまでの静けさを残してこの作品は閉じられるのである。

『濠端の住まい』の「川の水」は、内面の浄化を促すものでありながら、その人間の内面など頓着しない、作品中の言葉を用いるなら「不可抗な運命」の象徴としても描かれている。そこには、志賀の自然観の深化を見て取ることができるように思われる。

志賀直哉の『濠端の住まい』に見る「川の水」と芥川が松江に見た「川の水」を同じ土俵で論じることは簡単ではない。しかしながら、同じ松江を舞台としながら作品化を試みた時、両者が「川の水」にきわめて大きな意味を見出していたことは間違いないことである。

## 二 芥川龍之介『大川の水』について

続いて、『大川の水』は、大正三(一九一四)年四月、『松江印象記』執筆の一年余り前に「柳川隆之介」の署名で発表された。「幼い時から、中学を卒業するまで、自分は殆ど毎日のやうに、あの川を見た」とするその大川に対する〈自分〉の溢れんばかりの思い入れが綴られた、いわば大川讃歌の一篇である。

自分はどうしてかうもあの川を愛するのか。あの何方かと云へば、泥濁りのした大川の生暖い水に、限らない床しさを感ずるのか。自分ながらも、少しく、其説明に苦しまずにはゐられない。唯、自分は昔からあの水を見る毎に、何となく、涙を落としたいやうな、云ひ難い慰安と寂寥とを感じた。完く、自分の住んでゐる世界から遠ざかつて、なつかしい思慕と追憶との国にはいるやうな心もちがした。此心もちの為に、此慰安と寂寥とを味ひ得るが為に自分は何よりも大川の水を愛するのである。

ここに語られている「涙を落としたいやうな、云ひ難い慰安と寂寥」、「なつかしい思慕と追憶」とは何であろうか。右引用からほどなくして、「自分」は大川について次のようにも語っている。

此三年間、自分は山の手の郊外に、雑木林のかけになつてゐる書齋で、静かな読書三昧に耽つてゐたが、それでも猶、月に二三度は、あの大川の水を眺めにゆくことを忘れなかつた。動くともなく動き、流るゝともなく流れる大川の水の色は、静寂な書齋の空気が休みなく与へる刺戟と緊張とに、切ない程あわたゞしく、動いている自分の心をも、丁度、長旅に出た巡礼が、漸く又故郷の土を踏んだ時のやうな、さびしい、自由な、なつかしさととくしてくれる。大川の水があつて、始めて自分は再、純なる本来の感情に生きることが出来るのである。

ここにも、前者引用と同じく、「さびしい、自由な、なつかしさ」といった、大川の水に対する感情表現を見ることが出来る。しかし、前者と後者を仔細に読んでみると、同じなつかしさという表現であっても、そこ

には若干の意味のずれが生じているように思われる。まず、後者について見てみると、「さびしい、自由な、なつかしさ」には比喩による形容がなされていて、すなわち、「丁度、長旅に出た巡礼が、漸く又故郷の土を踏んだ時のやうな、さびしい、自由な、なつかしさ」とある。さらに、その前には「此三年間」の〈自分〉の状況が語られていて、山の手で読書に耽りながらも、「月に二三度は、あの大川の水を眺めにゆくことを忘れなかつた」とある。これらのことから、後者の引用における大川の水に対する「なつかしさ」は、子供の頃から慣れ親しんだ過去の大川に対する〈自分〉の思いと理解できる。

一方、前者の引用には、「自分は、昔からあの水を見る毎に、何となく、涙を落としたいやうな、云ひ難い慰安と寂寥とを感じた。完く、自分の住んでゐる世界から遠ざかつて、なつかしい思慕と追憶との国にはいるやうな心もちがした」とある。ここにある「慰安と寂寥」、「なつかしい思慕と追憶との国にはいるやうな心もち」は、現時点の〈自分〉が大川に対して感じるばかりではなく、「昔からあの水を見る毎に」、つまり子供の頃から感じていた感情として語られている。前者にうかがえる大川の水に対するなつかしいという感情は、後者のように過去を思い出して生じる感情という具合にはすつきり割り切ることができない。過去と結びつくわけでもないのに、なぜか「涙を落としたいやうな」気分させるほど、大川の水は〈自分〉の感情を揺さぶるのである。それゆえ、「自分ながらも、少しく、其説明に苦しまずにはゐられない」、「何となく」、「云ひ難い」というように、〈自分〉自身も自分の心の動きを捉えきれずにいるような表現が繰り返されているのではないだろうか。ともかく、芥川にとっての大川の水は、たんに過去の大切な思い出の風景としてあるのではなく、芥川本人にとつても不思議に思えるほど心の奥底から彼を揺さぶるものとしてあつたようである。<sup>(注6)</sup>

さて、芥川は大川の水について、その色彩を次のように描いている。けれど、自分を魅するものは独り大川の水の響ばかりではない。自分にとつては、此川の水の光が殆、何処にも見出し難い、滑さと暖さを持つてゐるやうに思はれるのである。／海の水は、たとへば

碧玉の色のやうに余りに重く緑を凝してゐる。と云つて潮の満干を全く感じない上流の川の水は、云はゞ緑柱石の色のやうに、余りに軽く、余りに薄つぺらに光りすぎる。唯淡水と潮水とが交錯する平原の大川の水は、冷な青に、濁つた黄の暖みを交へて、何処となく人間化された、親しさと、人間らしい意味に於て、ライフライクな、なつかしさがあるやうに思はれる。殊に大川は、赭ちやけた粘土の多い関東平野を行きつくして、「東京」と云ふ大都会を静に流れてゐるだけに、其濁つて、皺をよせて、気むづかしい猶太の老翁のやうに、ぶつぶつ口小言を云ふ水の色が、如何にも落付いた、人なつかしい、手ざはりのいゝ感じを持つてゐる。

右引用の中で、「大河の水」は、「海の水」や「上流の川の水」と比較されながら、「何処となく人間化された、親しさと、人間らしい意味に於て、ライフライクな、なつかしさがある」と語られている。さらに一般的な「大河の水」を「大川の水」に具体化して、ユダヤの気難しい老翁を比喩に用いながら「人間らしい」「ライフライク」なイメージを表現しようとしている。ところで、『松江印象記』の中で、芥川は先に引用したように、「松江は殆ど、海を除いて「あらゆる水」を持つてゐる」として、「濠の水」「川の水」と並べて宍道湖の水を「滑な硝子板のやうな光沢のある、どことなく「FEELIKEな湖水の水」と形容している。このことから察するに、大川の水と松江の水とは芥川にとつて多分に重なるところを持つた水であつたと思われる。さらに、その大川の水が先に見たように芥川の深奥に触れる要素を持ったものであることを考慮に入れば、松江の水に対する芥川の受け止め方もおおよそ見当がつく。その意味で、『松江印象記』は、松江の水讃歌と言つてよい。

もう一つ、『松江印象記』について着目したいことがある。『松江印象記』は全集で六ページほどの随筆である。その中で、芥川は松江の風景の描出をいくつか試みているが、より具体的に描かれている箇所は次の三つである。

松江へ着いた日の薄暮雨にぬれて光る大橋の擬宝珠を、灰色を帯びた緑の水の上に望み得た懐かしさは事新しく此処に書き立てる迄も

ない。

さうして蘆と藺との茂る濠を見下して、かすかな夕日の光にぬらされながら、かいつぶり鳴く水に寂しい白壁の影を落してゐる、あの方守閣の高い屋根瓦が何時までも、地に落ちないやうに祈りたいと思ふ。

自分は此孟蘭盆會に水邊の家々にもされた切角燈籠の火が檜の匂にみちた黄昏の川へ静な影を落すのを見た人々は少くとも容易くこの自分の語に首肯する事が出来るだらうと思ふ。

三つの引用に共通していることは、そこには必ず水が描かれているということである。それは、川の水であり、濠の水であり、さらにはそこに雨を含めてよいかも知れない。それに加えてもう一つ、三つに共通に描かれているのが特定の時間帯である。「薄暮」、「夕日」、「黄昏」がそうである。なぜに芥川は松江の川の風景を描くときに、決まって夕方の時間帯に設定したのだろうか。その疑問を念頭に、ふたたび『大川の水』をめぐってみると、次の一節に目が留まる。

殊に日暮、川の上に立こめる水蒸気と次第に暗くなる夕空の薄明とは、この大川をして殆、比喩を絶した、微妙な色調を帯びしめる。自分はひとり、渡し船の舷に肘をついて、もう靄の下りかけた、薄暮の川の水面を何と言ふ事もなく見渡しながら、其暗緑色の水のあな、暗い家々の空に大きな赤い月の出を見て、思はず涙を流したのを、恐らく終世忘れることが出来ないであらう。

大川の水が「比喩を絶した」色彩を帯びる時間、「恐らく終世忘れることが出来ない」ほどの経験をもたらした時間、それが「日暮」「薄暮」なのであった。芥川にとって、夕方は川がもつとも美しくなる時であり、川によつてもつとも心を揺さぶられる時間帯であったと言つてよさそうである。

### 三. 井川 恭『翡翠記』について

『翡翠記』において、井川と芥川との交遊が具体的に記されるのは第十三節以降である。『松江印象記』に相当する芥川の日記部分を挟みながら、芥川の松江訪問を告げる書簡に始まり、古浦海岸での海水浴、出雲大社参拝、波根海岸での海水浴・宿泊の様子が記されている。

七月末、芥川から井川に送られた書簡には、松江に行く旨が記されておりと同時に、その後に「歌を七つ八つ」添えてあり、その中の一首が次の通り『翡翠記』の中で紹介されている。

こちごちのこゝしき山ゆ雲出でて驟雨するとき出雲に入らむ

「雲出でて」と「出雲」という二語のあいだに挟まれて、「驟雨」の語が見える。おそらく、この歌の作者である芥川の頭の中では、「出雲」⇓⇓雲が多い⇓⇓雨」という連想が働いたのではあるまいか。ところで、井川が「七つ八つ」あつた芥川の歌の中からなぜにこの一首を引用したのか。第十三節の冒頭には、「毎日々々空が群青色に深く晴れて雨を降らす法をまつたく忘れて仕舞つたやうに憎らしい程澄み切つた天が涯無く頭のうへに擴つてゐる七月の末ごろ」とあり、ひとつには井川自身が「雨来るのを待望していたということがあるだらう。果たして、芥川来松の当日には、「滅茶々々の暴風雨」となつており、「會つたら先づ『君の歌があまり好きすぎたやうだぜ』と言つてやらうなどと心の内に考へながら獨り雨のなかを停車場さして友を迎へに出た」ところで第十三節は終わる。そして、続く第十四節には芥川の日記が引用され、川の水について語られることになる。すなわち、『翡翠記』後半の芥川登場の箇所については、その冒頭にまず雨の話題があり、次いで川の水に移つていくという構成になつていゝことをここで確認しておきたい。

ところで第十三節には、もう一つ看過できないことがらが書かれている。八月に入り、井川のもとに芥川から「五日午前九時八分城崎發、午後四時十九分松江着」と旅程が届くと、井川は、「アスレイジ四七フンハツニセヨ」、すなわち城崎を發つのを午前九時八分から正午過ぎの列車に遅らせるように電報を打っている。その事情について、井川は次のように書いている。

わざ／＼そんな面倒な手續を踏んで夕方に松江に着く都合にさせた

のには一とかどの理由があつた、第一には、すべて人は最初の印象に支配される力が強い、僕は自分の生まれた土地として此松江に對して或る程度の愛着の念を有つてゐる、だからこの未だ見ぬ國を指してはるばるやつて来る友人の眼に、うつくしいゆうべの光に包まれてゐる松江の街を先ず映させ度かつた。／次にはすゞしい夕ぐれに湖を西へ西へと彼を載せた舟を棹さしながらこの春品川で別れて以来溜つてゐるたく山の聞き度いこと、話したいことを聞きもし話しもし度いと思つてゐた——その事自身の中にロマンチックな或るものが含まれてゐるやうな気がして、ぜひ夕方だけでなくちやああと云ふ考へを更につよくした。

一読して、友人芥川に對する井川の気のつかいようにはまず驚かされる。と同時に、夕方という時間帯への井川のこだわりも伝わってくる。井川は、夕方に宍道湖を舟で行きながら、芥川と語り合う二人の時間を夢想して、それはすでに友情の域を超え出るほどの熱い思いが感じられる。それはともかくも、既に見たように、夕方は芥川の愛する時間帯であり、宍道湖についても芥川は彼の心に深く影響を及ぼしている大川と同様の性質をそこに見出してゐた。つまりは、夕方という時間、宍道湖という場所の二点において、二人の理想とする風景は、みごとに共鳴しあつていたと言えよう。

次に、第十五節、第二十節に描かれる、古浦海岸での海水浴、出雲大社参拜、波根海岸での海水浴・宿泊の様子について考察する。

古浦海岸に辿り着いた時、芥川の日本海に對する第一印象は、「暗いね！海の色が」だった。これは、『大川の水』にあつた、「海の水は、たとへば碧玉の色のやうに余りに重く緑を凝してゐる」の一文に通うものがある。その後二人は比較的波の荒い日本海に身をゆだねるが、芥川の様子について詳しいことは書かれていない。ただし、沖に出て、海に浮かんでゐる際の心境について、井川は次のように書いてゐる。

頭のうへには潮の氣を一杯に含んだ風が陰しい峻しい岸の岩山を蔽ふ草木の緑りを慕つていさんで吹いて行く、身体の下には海が暗い神秘の生をひそめてふかしぎの踊りを止み間も無くをどり續けてゐる……大空と、海とそのあいだに眞の悦びと自由とが原始人の感じたまゝのフレッシュネスを帯びて揺つてゐることを知る。

芥川はともかく、井川はここで、空と海のあいだで、生の根本にかかわるやうなきわめて原初的な快樂に身を委ねていたことが明らかである。

古浦海岸に行った翌日、井川と芥川は朝から列車に乗つて大社へ向かつてゐる。玉造、宍道、簸川平野を過ぎて斐伊川に架かる神立橋を渡り、大津、今市を経て大社の駅に到着した。出雲大社に参拝し、次いで稲佐の浜に立つた時、芥川の発した一言は、またしても、「日本海は暗いな」だった。二人は稲佐の浜でも泳ごうとしたが波が荒くてうまく行かず、夕方四時の汽車で大田の波根に向かつて。宿に到着し、部屋に「あがつて見ると眺望はすでに佳い、二人は海にのぞんだ椽にこしかけたまゝ、『佳いね！ほんとうにいゝね！今夜こゝへ来てよかつた』とお互ひにいそがしく言ひ續けた」とあり、二人の興奮した様子が伝わってくる。古浦、稲佐で日本海を目にした時、その暗さを口にした芥川は、波根では一言もそのようなことは言わなかつた。なぜなら、芥川と井川の目の前に広がる日本海はちょうど夕日に染まつていたからである。

二人はいそいで衣服をぬいで椽の前の高い石垣に架けてある板の棧を下りて海に跳びこんだ。／(中略)／恰度その折太陽は、燦爛たる榮光の王冠を火炎の中に抛つやうに爛々と燃えながら海の涯に沈むで行つた。／「あつ、うつくしい！」／「うつくしいね！」と浪のあいだから二人がうれしくて耐らないやうな聲を叫んで、そのゆうべの「日の終焉」の榮を讚めたゝへた。／裸かな二人のからだのまはりには金色や、くれないみや、藍緑や、紺青やの浪の文、浪の模様様が肌にとほる冷めたさと共に纏れ絡らみはるかな海の端には、日のまつたく没したあとの空に呪文の象をした雲が焰のかたまりのやうに燃えかがやいてゐた。

二人は、翌日の正午過ぎに波根をあとにしている。その折の事を、井川は、「愛すべき波根の村よ！うつくしかつた昨夕の日没よ！」とこゝろの中にさげびながら、隧道の中に吞まれて行かうとする汽車の窓から

僕はうしろを振り返つてみた」と結んでいる。

芥川が松江に到着した日、あいにくの暴風雨に阻まれた、夕方の六道湖でロマンティックに過ごす夢を、井川はついに波根で実現したかに思える。芥川にとつても、この時の波根の状況が彼の心を深く揺さぶるものであったことは想像に難くない。

『翡翠記』の翡翠は、言うまでもなくカワセミのことである。『翡翠記』の中で、翡翠は第九節と第二十二節にわずかだが登場する。第九節から引用する。

少しはなれた河岸に生えてある櫛の木の水にさし出た枝のうへに一羽の翡翠が棲まつてゐて静かに水のなかを窺つてゐる。／＼と、身を跳らして水のなかに潜り入り、たちまち復た魚を啣へておどり出て、つうつうと啼きながら彼方の樹の茂みを指して翔つて行く。／＼寶石の光りの貴とさを持つてゐる色澤うつくしい瑠璃いろの翅をひらりと閃かせるかと思ふと早や暗い樹の蔭にその鳥のかたちは隠れてしまふ。うつくしい人が懐かしい眸をちらと見せてすぐと消え失せたときのやうに、幻影のひかりがこゝろの中をはぐたいて通り過ぎる。

翡翠は水中に潜つて獲物を捕まえる。『翡翠記』に描かれた芥川との交遊場面はいずれも海であり、二人は決まつて海に飛び込んでゐる。翡翠は色彩の美しい鳥である。波根の海で泳ぐ二人について、「裸かな二人のからだのまはりには金色や、くれないあや、藍緑や、紺青やの浪の文」と、なぜこんなにも色彩豊かに描かれたのか。『翡翠記』の翡翠とは、ほかならぬ芥川と井川の象徴ではなかつただろうか。井川が「うつくしい人」と書くとき、それは誰よりも友人芥川龍之介のことを指していたのではないだろうか。<sup>(注)</sup>

## おわりに

『松江印象記』に見られる芥川の松江に対するイメージは、いろいろあるなかで松江を流れる「川の水」に対する印象が最も強かつたようである。そして、その松江の「川の水」は、芥川が子供の頃から慣れ親し

み、彼の精神の根幹に触れうるほどの影響力を持つ「大川の水」と重なりうるものだった。さらに、その「川の水」は、芥川にとつて、夕方という時間帯により特別な意味を帯びるものとしてあった。

井川恭の『翡翠記』は、芥川との交遊を書いた後半部分に限つて言えば、暴風雨に始まり、松江の川を讀えた芥川の日記部分、芥川と井川の海水浴場面という具合に、ほぼ全編、水に関係することで覆われている。

『翡翠記』に描かれた波根での海水浴の場面は、読んでいて特に印象に深い。二人とも裸になつて海に飛び込み、赤々と沈んでいく夕日に向かつて「美しい」と感嘆する。この時二人は翡翠のように眩い色に包まれて、彼ら自身もまた美しい人として描かれている。興味深いことに、古浦、稲佐、波根それぞれの海岸の場面において、井川が共通して使用している言葉がある。それは、「裸」の一字である。古浦の「『ぢやあ直ぐおよがう』と衣服を脱いで裸に成ると」、稲佐の「しばらくしてから裸になつて濱へ出てみると」、そして稲佐の「裸かな二人」。いささかくどいくらいに井川がこの語を使用するのは、むしろ「裸」であることが井川にとつて重要な要素であつたからである。そこに、古浦海岸の海水浴場面での、「原始人の感じたまゝのフレッシュネス」という感想も付け加えて考えれば、芥川と井川にとつての海水浴とは、わが身にまわりついた夾雑物をすべてはぎ取つて、それこそ文字通り裸になつて、新鮮な自己に立ち返るための通過儀礼であつたかと思われる。そこに一日の終わりを告げる夕日が加われば、リセットとしての舞台はさらに整う。

果たして、現実の芥川と井川が松江での交遊を通してどれほど新鮮な経験を持ちえたか、特に芥川にとつて、失恋による傷心を癒し、新たな気持ちにどれほど切り替えることができたかは想像の域を出ない。しかし、波根での海水浴の場面を描いた井川の芥川に対する思いは痛いほど伝わってくる。そして、その思いが芥川に伝わらなかつたはずはないであらう。

或日の暮方の事である。一人の下人が、羅生門の下で雨やみを待つてゐた。

『羅生門』冒頭の一行である。この一行のうちに、「暮方」という時間帯、「雨」という水の要素がすでに表れている。芥川の松江の印象に見られた要素との連続性は明らかである。それらの要素が『羅生門』においていかに生かされているかは、別稿に譲ることとする。

『松江印象記』、『大川の水』、『羅生門』からの引用は、『芥川龍之介全集』（岩波書店）に拠った。

『翡翠記』からの引用は、『袖珍 翡翠記』（山陰中央新報社）に拠った。

注1 関口安義編『新潮日本文学アルバム十三 芥川龍之介』（昭和五十八（一九八三）年、新潮社）に次の通りある。「龍之介は、実家新原家の女中、吉村千代に一方的ともいえる恋情を寄せ、その気持ちを告白した手紙を出している。それは叶わぬ恋であった。次に彼は青山学院英文科出の吉田弥生という才媛を知り、結婚の意思表示までしている。が、この恋も養家の人々の反対にあつて破局に至り、彼の心に深い傷を残すこととなる。」

注2 「その頃の自分の事」（『中央公論』大正八（一九一九）年一月）の中で、芥川は次の通り書いている。「それからこの自分の頭の象徴のやうな書齋で、当時書いた小説は『羅生門』と『鼻』の二つだった。自分は半年ばかり前から悪くこたわつた恋愛問題の影響で、独りになると気が沈んだから、その反対になる可く現状と懸げ離れた、なる可く愉快な小説が書きたかつた。そこでとりあえず先、今昔物語から材料を取つて、この二つの短編を書いた。書いたと云つても発表したのは『羅生門』だけで、『鼻』の方はまだ中途止まつたきり、暫くは片づかなかつた。」

注3 寺本喜徳編『井川 恭著 翡翠記』解説（平成四（一九九二）年、島根国語国文刊）に拠る。

注4 増田涉宛書簡（大正十三（一九二四）年二月二九日付）の中で、

芥川は、「わたしは松江にゐた時、松江紀行のやうなものを書いて松陽新報にのせて貰ひましたこれがわたしの芥川龍之介と署名して書いた第一の文章です。」と書いている。

注5 恒藤恭「思い出の松江・人と風物」（『島根県人』No.9・10、昭和三十五（一九六〇）年）に、次の通りある。「大正四年（一九一五年）の夏休みに、当時京大の二回生であった私は、一高時代の同級生であつた芥川龍之介を松江に招いた。そのころ母や妹や弟たちは、うべや橋の近くの家から他の場所に移つて住んでいたが、その家が手狭であつたので、芥川を迎えるために、お花畑にささやかな空家をめつけて、しばらくそこを借りた。八月三日に東京を出発した芥川は、五日の夕ぐれに松江に到着し二十一日まで滞在した。そのあいだ母がお花畑の家に来て、私たちと起居を共にし、炊事をしてくれた。それは亀田橋（？）のすこし手前にある、城のお濠に臨んだささやかな平屋造りの家で、せまい庭のすぐ東側には、お濠の水がひたひたとたたえていた。」

注6 関口安義氏は、『芥川龍之介 実像と虚像』（昭和六三（一九八八）年、洋々社）の中で、次の通り述べているが、「純なる本来の感情」を過去の幼少年期の感情に特定する考え方に筆者は一線を画している。「純なる本来の感情とは、恐らくは芥川道草・儔夫婦を実の父母と信じ、周囲に配慮する必要もなく、自然に振舞い、行動することのできた幼少年時の感情を指すのであろう。生後およそ八ヶ月で芥川家に引き取られた龍之介は、十二歳になった明治三十七（一九〇四）年八月に、正式に養子縁組を結んでいる。彼がいつ自身の特殊な位置に気付いたかは不明だが、少なくとも大川の水の流れのほとりて育つた幼少年時代には人間らしくわがままを言い、他人の迷惑を考えず、自由に飛びはね、快活に生活できた日々が、大川の水とともにあつたはずである。」

注7 寺本喜徳氏は、『井川 恭著 翡翠記』解説（平成四（一九九二）年、島根国語国文刊）の中で、『翡翠記』の翡翠の暗示性について、次の通り述べている。「表題の『翡翠記』も暗示的である。芥川



を迎える家の裏の濠に時々姿を見せる〈翡翠〉は、芥川来松の前と後に布置してあり、全体に穏やかな色調の漂う濠の草木や生き物たちの中で、〈宝石の光りを持つてゐる色沢うつくしい瑠璃いろの翹〉（九）、〈あかるい藍青の光〉（二十二）と、この上なく美化されている。これは、端正さと気品と知性の輝きを備えた心の友芥川龍之介のイメージでなくてなんであろう。」

（受稿平成二八年一〇月二九日、受理平成二八年一月二四日）